保健看護学科初年次教育の効果と課題
- 自己教育力および自己管理能力の側面から -

山口 直己・堀井 直子・牧野 典子・城 憲秀・杉田 豊・足立はるみ

1 はじめに
近年、大学全人時代に伴い、学習意欲や目的意識が
低い学生の増加、大学生の学力低下などが指摘されて
いる1)。このような状況の中で、高等学校から大学で
の学習への円滑な移行を図るために、新人生を対象に
大学での学問のスキルや生活リズムの構築などを中心
とした「初年次教育」が注目されている。2007年に全
国すべての国立・私立大学を対象に行われた調査によ
ると、97％の大学で初年次教育が導入されているとい
う2)。
本学においても初年次教育（以下、スタートアップ
セミナー）の重要性が叫ばれ、全学通共教育科目とし
て2010年4月から導入された。保健看護学科において
は、看護師・保健師など専門職を育成することを目的
としていることから、学科創設以来「初年次教育」を
重視し、大学での学習方法やレポートの書き方など春
学期に開講される講義内で授業以外のプログラムとし
て取り入れてきた。今回、全学共通教育科目として位
置づけられたことから、これまでの内容を系統的に整
理し、初年次教育の目標を「学習スキル」、「健康生活」、
「キャリアデザイン」の3本柱として春学期2単位で
実施した。
我が国における初年次教育に関する研究の歴史は浅
く、2007年に第1回初年次教育学会が開催されて以降、
初年次教育に関する研究が報告されるようになった。
先行研究では、実践報告や高校時代の学力、大学志望
動機、学生のニーズから教育方法を検討した研究が中
心となっており1)〜3)、教育効果に関する研究はまだ十
分に検討されていない状況にある。
大学において学生が主体的・自律的に学びを深めて
いくには、主体的に学ぶ意欲、態度などの「自己教育
力」や自らの行動を統制し目的達成をめざす「自己管
理能力」を高める必要があると考えられる。そこで今
回、本学科のスタートアップセミナーの効果を検証す
るために、「自己教育力」、「自己管理能力」の2つの
側面から調査し、初年次教育の今後の課題を検討する
ことを目的とした。

2 研究目的
平成22年度入学生に実施したスタートアップセミナー
の効果と課題を自己教育力および自己管理力の側面か
ら明らかにする。

＜用語の定義＞
「自己教育力」：主体的に学ぶ意欲・態度・能力など
をいい、学習への意欲、学習の仕方の習得、自己に
より自己を高め続ける意思や能力をいう1)。
「自己管理能力」：目的達成をめざし、自らの行動を
統制・努力する能力をいう2)。

3 研究方法
3.1 研究対象
平成22年度保健看護学科に入学した1年生114名を
対象とした。
なお、受講したプログラムを資料1に示す。

3.2 調査方法
無記名自記式調査表をスタートアップセミナー初回
授業時（4月）と最終授業時（7月）に講義室にて配
布し、参加が強制されることを避けるため回収箱を設
けて回収した。

3.3 調査内容
1）対象者の基本属性
性別、年齢の他に、個人が特徴されず同一学生の前
後比較を行うために携帯電話の下4桁の番号および好
きな動物について質問した。

2）自己教育力尺度
自己教育力の測定には、西村ら4)が作成した自己教
育力測定尺度を用いた。この尺度は、「I. 成長・発
展への志向」、「II. 自己の対象化と統制」、「III. 学習
の技能と基盤」、「IV. 自信・プライド・安定性」の4
側面で構成されており、それぞれ10項目の下位項目か
らなる。合計40項目からなる質問に対して、
「とてもあてはまる：4」、「どちらかといえばあては
まる：3」、「どちらかといえばあてはまらない：2」、
「まったくあてはまらない：1」の4件法で回答を求め
3）自己管理能力
高橋らが作成した自己管理スキル尺度を用いた。この尺度は、Rosenbaumのセルフ・コントロール・スケジュール、過去の社会的スキルに関する研究、ライフスキルに関する健康教育上の目標例などを参考に作成され、「何かしようとするときには、十分に情報収集をする」、「難しいことをするときに、できないかもしれないと考えてしまう」など自己管理スキルに関する10項目で構成されている。これらの質問に対して、「自己教育力」と同様に4件法で回答を求めた。この尺度の総合得点は最低10点から最高40点であり、総合得点が高い程、自己管理能力が高いことを示している。

3.4 分析方法
初回授業時と最終授業時における自己教育力および自己管理能力の総得点と各項目の比較検討を行った。さらに、自己教育力と自己管理能力の総得点が高かった順に高齢、中群、低群の3群に分け同様に比較検討を行った。また、自己教育力については、「I. 成長・発展への志向」、「II. 自己の対象化と統制」、「III. 学習の技能と基盤」、「IV. 自信・プライド・安定性」の4側面での比較も行った。前後比較にはWilcoxonの符号付順位検定を行い、5％未満を統計的に有意とした。統計分析にはSPSS Ver.15を用いた。

3.5 倫理的配慮
調査表を配布するにあたり対象学生に対して、研究の目的、個人情報の保護、自由意志による参加、回答拒否による不利益は生じないこと、調査表は無記名であり、得られたデータは統計的処理を行うため個人が特定されないこと、データは研究目的以外には使用せず、研究終了後に破棄すること等を文書と口頭で説明し、調査表への回答によって同意を得たものとした。なお、本研究を実施するにあたり本学倫理審査委員会の承認を得た（承認番号220007）。

4 結果
4.1 対象者の基本属性
調査表の回収数は初回授業時114名、最終授業時110名であった。内、携帯番号の下4桁が前後で一致しており、欠損値がない84名を分析の対象とした。
性別は、男性12名（14.3％）、女性70名（83.3％）、未記入2名（2.4％）であった。年齢は、18歳～30歳、平均18.3±1.7歳であった。

4.2 自己教育力
1）スタートアップセミナー前後の総得点・因子別得点比較（表1）
自己教育力総得点は、セミナー前後において有意差は認められなかった。一方、因子別総得点では、「III. 学習の技能と基盤」（p<0.005）において有意差を認めた。その他の因子、「I. 成長・発展への志向」、「II. 自己の対象化と統制」、「IV. 自信・プライド・安定性」については有意差を認めなかった。

2）項目別比較（表2）
項目別比較において有意に上がった項目は、「I. 将来、他人から尊敬される人間になりたい（p<0.000）」、「II. 自分の調べたいことがある時に図書館（室）を利用している（p<0.003）」、「IV. 考えを深めたり、ひろげたりするのに話し合いや討論を大切にしている（p<0.002）」、「31. 生まれ変わることから、やはり今の自分に生まれたい（p<0.006）」、「28. 疲れているときは何もしたくない（p<0.04）」、「26. 自己評価するときには、自分の目標に照らしておこなっている（p<0.048）」であった。逆に有意に下がった項目は、「33. ほんやりしても考えずに過ごしてしまうことが多い（p<0.009）」であった。有意に上がった項目を列挙する

<table>
<thead>
<tr>
<th>因子</th>
<th>実施前</th>
<th>実施後</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>中央値</td>
<td>平均値（SD）</td>
</tr>
<tr>
<td>自己教育力総得点</td>
<td>105.0</td>
<td>105.1（10.0）</td>
</tr>
<tr>
<td>I. 成長・発展への志向</td>
<td>30.0</td>
<td>31.0（3.8）</td>
</tr>
<tr>
<td>II. 自己の対象化と統制</td>
<td>27.0</td>
<td>27.0（2.9）</td>
</tr>
<tr>
<td>III. 学習の技能と基盤</td>
<td>24.0</td>
<td>25.0（4.0）</td>
</tr>
<tr>
<td>IV. 自信・プライド・安定性</td>
<td>23.0</td>
<td>24.0（4.6）</td>
</tr>
</tbody>
</table>

** p < .01
### 表2 自己教育力得点項目ごとの比較

<table>
<thead>
<tr>
<th>項目（逆・順方向）</th>
<th>実施前</th>
<th>実施後</th>
<th>(\rho)値</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>中央値</td>
<td>平均値</td>
<td>中央値</td>
<td>平均値</td>
</tr>
</tbody>
</table>
| 1. 将来、他の人から尊敬される人になる
| 2. 自分の能力を最大限に発揮しよう、いろいろ努力したい
| 3. 今から伸びる気もある、自分を目標に向かって努力したい
| 4. 自分で恥じなければならないことをやってみたい
| 5. 自分がやり始めたことが、最後までやり続けたい
| 6. 社会に出てからより仕事をして、より多くの人に認められたい
| 7. これから専門的資格や学位などを取りたい
| 8. いい高いために勉強するのだろうか、いかに成長しているか（逆）
| 9. ぼんやりして何も考えずに過ごしてしまうことが多い（逆）
| 10. 人生の主観判断（結果）の達成となりうる（逆）
| 11. 自分の良いところを自分で考え直すようにいつも心がけている
| 12. 自分の悪いところを隠すところが少なくわかる
| 13. 他の人から米指を指摘されると自らでも考え検討する
| 14. 腹が立ってもひとり言を言ったりしないように注意している
| 15. 仮定しているときは、何も考えなかった（逆）
| 16. テレビを見てしまう、観察ができないことが多い（逆）
| 17. ちょっといいなやなことがあると、すぐに不適切になる（逆）
| 18. いない時でも、もうちょっとだけ、もっとよく見ると

### 表3 自己教育力総得点3群間の比較

<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>実施前</th>
<th>実施後</th>
<th>(\rho)値</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>中央値</td>
<td>平均値</td>
<td>SD</td>
</tr>
<tr>
<td>高群(112以上)(n=26)</td>
<td>115.0</td>
<td><strong>116.3(5.1)</strong></td>
<td>0.056</td>
</tr>
<tr>
<td>中群(103以上~111以下)(n=30)</td>
<td>105.0</td>
<td><strong>105.8(3.0)</strong></td>
<td>0.460</td>
</tr>
<tr>
<td>低群(102以下)(n=28)</td>
<td>95.0</td>
<td><strong>93.9(4.5)</strong></td>
<td>0.693</td>
</tr>
</tbody>
</table>

**p < .001**  **p < .01**  **p < .05**

た6項目のうち、「2. 自分の調べたいことがある時
に図書館（室）を利用している」、「14. 考えを深めたり、ひろげたりするのに話し合いか討議を大切にして
いる」、「26. 自己評価するときには、自分の目標に照
らしておなじんでいる」の3項目は、第Ⅲ因子「Ⅲ、
学習の技能と基盤」に含まれる項目であった。

3）総得点3群間の比較（表3）

スタートアップセミナー前の総得点を平均値±1/2

SDで3群（高群：112以上、中群：103以上~112
未満、低群：102点以下）に分け、実施前の総得点
の比較を行った結果、高群において低下の傾向
（p<0.05）を認めた。

4）因子別3群間の比較（表4）

因子別3群間の比較では、中群の「Ⅲ、学習の技能
と基盤（p<0.022）」および低群の「Ⅳ、自己・プラ
イド・安定性（p<0.006）」において有意差を認めた。
4.3 自己管理能力
1）総得点・項目別の比較
総得点では、スタートアップセミナー前後において有意差を認めなかった（表5）。
項目別にて有意差に上がった項目は、「2．難しいことをするときに、できないかもしれないと考えてしまう（p<0.004）」の1項目であった。逆に有意に低下した項目は、「1. しゃけててはならないことよりも楽しいことを先にしてしまう（p<0.001）」の1項目であった（表6）。

2）総得点3群間の比較（表7）
スタートアップセミナー前の総得点を平均値±1/2 SDで3群（高群：28.0以上、中群：25.0以上28.0未満、低群：24.2以下）に分け、スタートアップセミナー前後の総得点の比較を行った。その結果、各群において、中央値22.0から23.5（p<0.001）と有意に上がっていた。一方、高群においては、中央値30.0から29.0（p=0.027）と有意に低くしていた。

---

### 表5 自己管理能力総得点の比較

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>実施前</th>
<th>実施後</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>自己管理能力総得点</td>
<td>26.0</td>
<td>26.2 (3.9)</td>
</tr>
</tbody>
</table>

### 表6 自己管理能力項目ごとの比較

<table>
<thead>
<tr>
<th>項目（逆-逆転項目）</th>
<th>実施前</th>
<th>実施後</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1.何かをしようとするときには、十分に情報を収集する</td>
<td>3.0</td>
<td>2.6</td>
</tr>
<tr>
<td>2.難しいことをするときに、できないかもしれないと考えてしまう（逆）</td>
<td>2.0</td>
<td>1.9</td>
</tr>
<tr>
<td>3.失敗した場合、どこが悪かったかを反省しない（逆）</td>
<td>3.0</td>
<td>3.1</td>
</tr>
<tr>
<td>4.何かを実行するときには、自分なりの計画を立てる</td>
<td>3.0</td>
<td>2.9</td>
</tr>
<tr>
<td>5.失敗すると次回もだめだろうと考える（逆）</td>
<td>3.0</td>
<td>2.5</td>
</tr>
<tr>
<td>6.作業しやすい環境を作ることがにがていた（逆）</td>
<td>3.0</td>
<td>2.7</td>
</tr>
<tr>
<td>7.困ったときには、すぐ何が問題かを明確にする</td>
<td>3.0</td>
<td>2.7</td>
</tr>
<tr>
<td>8.しなくてはならないことよりも楽しいことを先にしてしまう（逆）</td>
<td>2.0</td>
<td>2.3</td>
</tr>
<tr>
<td>9.何をしたらよいかを考えないまま行動を開始してしまう（逆）</td>
<td>3.0</td>
<td>2.5</td>
</tr>
<tr>
<td>10.自分ならできるはずだと心の中で自分を勘ます</td>
<td>3.0</td>
<td>2.9</td>
</tr>
</tbody>
</table>

* p<0.05

### 表7 自己管理能力総得点3群間の比較

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>実施前</th>
<th>実施後</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>高群（28.0以上）n=19</td>
<td>30.0</td>
<td>29.5 (3.3)</td>
</tr>
<tr>
<td>中群（25.0以上28.0未満）n=39</td>
<td>27.0</td>
<td>26.0 (2.7)</td>
</tr>
<tr>
<td>低群（24.0以下）n=26</td>
<td>22.0</td>
<td>21.8 (3.2)</td>
</tr>
</tbody>
</table>

** p<0.01  * p<0.05
5 考察
5.1 初年次教育が自己教育力へ与える影響
自己教育力において、スタートアップセミナー前後で有意に上昇した因子は「Ⅲ．学習の技能と基盤（p<0.05）」であった。今回行ったスタートアップセミナーの内容は、自己教育力の中でも学習スキルの習得に効果があったと考えられる。これは、中部大学スタートアップセミナー共通内容「大学における初步的な学びのスキル」を受けた取り組みの結果であり、成果は得られたと考える。項目別では、「自分で調べたいことがある時に図書館を利用している」「考えを深めたり、広げたりするのに話し合いや討議を大切にしている」「自己評価するときには、自分の目標に照らして行っている」において有意差を認めた。これにより、
本学科のスタートアップセミナーの効果と考えることができる。具体的には討議の前後の、効果的なグループ学習の技法を学生に伝え、教員が共通の教育目標を持ち、少人数制で学生をサポートしたことにより、学生同士が学び合い、助け合う機会を提供できたと考える。また、
スタートアップセミナーは「大学の基本理念や学びの精神」では、本学科は、大学理念や学科の教育目的・目標を教示する際、それを4年間で達成するための具体的な行動目標を提示し説明している。学生にとっては年間のアクションプランがイメージできる。看護職をめざす本学科の学生にとって「大学生活のライフプランとキャリアデザイン（大学の共通内容）」にも結び付く取り組みと考えられる。さらに学科独自の取り組みとして、学生が各セミナー終了時に行動目標について形成評価（自己評価）をすることを課せられるため、自己目標を意識した自己評価の必要性を十分理解できていると考えられる。初年次教育のプログラムの特徴は、教育内容にのみあるのではなく、その前提として教育方法に特徴があると言わざるを得ない。上述したように本学科のスタートアップセミナーにおける教育方法の工夫は入学後の学生が主体的に学び続けるためには重要な布石になっていくと思われる。

自己教育力3群間比較では、入学時の自己教育力得点が中等であった学生（「Ⅲ．学習の技能と基盤（p<0.022）」）においてスタートアップセミナー後には有意に上昇していた。また低群の学生は「Ⅳ．自信・プライド・安定性（p<0.006）」において、自己教育力得点の有意な上昇を認めた。今回行ったスタートアップセミナーの内容は、中等・低群の学生の学習スキルや大学生活を送ることへの意欲を高めることに繋がったと言える。初年次教育の本来の軸は、高校から大学への円滑な移行にある。したがって入学時の自己教育力得点が中等群と低群の学生においては期待通りの成果が得られたと考える。

本学科1期生（2006年度生）に行った自己教育力に関する先行研究において、自己教育力の総得点は入学から入学1年後にかけて低下することが明らかになっているが、これは初年次教育が導入されていない時期の結果であった。今回の調査ではスタートアップセミナーの実施が自己教育力の向上を示す可能性が示唆された。

5.2 自己管理能力への効果
自己管理能力総得点において、スタートアップセミナー前後で有意差は認められなかったが、項目別比較では、「2．難しいことをするときに、できないかもしれない」と考えてしまう（p<0.034）」の1項目において有意差を認めた。大学という新しい環境の中で、初めて挑戦する課題に対して成功体験を持たない学生は、時間や健康、ストレスに対する自己管理スキルを学ぶことによって、困難なことに直面してもそれを乗り越えようとする意欲に繋がったことが推測される。
一方、有意に低下した項目は、「8．しなくてはならないことよりも楽しいことを先にしてしまう（p<0.031）」、低下的傾向がみられた項目は、「8．作業しやすい環境を作ることが苦手だ（p<0.096）」であった。日常的に、順番順位や生活ベースを整えることが出来ない状況が推測され、実行できるようになれるにはある程度の時間が必要と考える。

さらに、総得点を高群・中群・低群の3群に分け、スタートアップセミナー前後の比較を行った結果、低群において有意な上昇（p<0.001）を認めたが、高群においては、有意な低下を認めた（p<0.027）。今回

スタートアップセミナー内容は低群においては効果的であるが、高群の学生に対しては効果が期待できなかったことを示している。これは、入学時にある程度自己管理能力が身についていても、新しい環境の中で健康生活をマネージメントしていくための困難性が推察される。本学科カリキュラムの特徴として、3年次秋学期より約1年間にわたる臨床実習がある。学内とは違い、「病院」という命を扱う環境の中で、毎日、新しい経験を積むことが多い。ここに自己管理能力の未熟さに気づき、身につける必要性を理解した。今後、機会あることに意識して対応し、継続的に変化を確認していく必要がある。

本稿では、教育において重要視されている自己教育力と自己管理能力の2側面から初年次教育の成果を分析してきた。本学科では、スタートアップセミナーの実施に向けて、学生への教育の質保証をするために、教員が用意を広めた作成した。それによって担当教員の姿
意に認められることを回避し、共通の目的意識と内容・方法の共有はかがくことができ、一定の成果を得ることができたと考える。

5.3 本学科における初年次教育の今後と課題
以上の分析結果から、本学科の初年次教育プログラムは「Ⅲ．学習の技能と基盤」を高めること、入学時に自己教育力や自己管理能力が低い学生を高めることに効果があったと考える。初年次教育において学生の自己教育力や自己管理能力がある程度促進するとしても、それらは各科目の学習を通じて継続的に繰り返されるものである。最終的には4年間の学士課程教育修了時に、何ができるようになっているのかというアウトカム評価の文脈の中で検討する必要がある。

6 結論
保健看護学科のスタートアップセミナーの効果を「自己教育力」、「自己管理能力」の2側面から分析した結果、以下のことが明らかになった。
1. スタートアップセミナーは、自己教育力の中でも「Ⅲ．学習の技能と基盤」を高めることに効果があった。
2. スタートアップセミナーは、自己教育力得点中群・低群の学生の学習スキルや大学生活を送ることへの意欲を高めることに繋がった。一方、高群の学生の自己教育力に変化は認められなかった。
3. スタートアップセミナーは、自己管理能力の低い学生を高めることに効果があったが、高い学生は有意に低下していたことより、大学生活をマネジメントしていく困難性が示唆された。

謝辞
本調査にあたりご協力いただきました本学保健看護学科の学生の皆様に心より感謝申し上げます。

引用文献
1）菊池重雄：初年次教育の実際——玉川大学における具体的な展開——. 看護教育、Vol.50(5)、382-387、2009。
2）山本礼子、杉谷由美子：初年次教育の「今」を考える一2001年調査と2007年調査の比較を手がかりに一. 大学院教育学会誌、30(2)、83-87、2008。
3）保田卓：高校生は大学に何を求めているか——志望校設定者別・学科別比較——. 大学院教育学会誌、29 (2)、131-136、2007。
4）山本礼子、相原綾一郎：学習方法・大学生活における教育効果の比較検討—JCSS2005データから一. 日本教育社会学会大会発表要旨集、56、119-122、2004。
5）前掲載2)
6）西村千代子、奥の茂代、小林洋子：看護婦の自己教育力——日本赤十字幹部看護研修所紀要第11号、9-39、1995。
7）高橋浩之：健康教育への招待——大学病院病院、1996。
8）前掲載5)
9）前掲載7)
10）堀井直子、近藤聡子、三浦清世美他：保健看護学科における「教育目標の形成評価システム」の開発——学生と指導教授からの評価——. 中央大学教育研究、No10、109-116、2010。
11）牧野典子、中村奈津香、堀井直子他：生命健康科学部学生の自己教育力——第二報——入学後1年間の自己教育力——. 中央大学生命健康科学部研究所紀要 第4号、21-28、2008。

助 教 看護実習センター 山口 直己
准教授 生命健康科学部 保健看護学科 堺直子
教授 生命健康科学部 保健看護学科 牧野 典子
教授 生命健康科学部 保健看護学科 城 憲秀
助手 看護実習センター 杭田 豊子
教授 生命健康科学部 保健看護学科 足立はるえ
### 資料1 スタートアップセミナー講義概要

<table>
<thead>
<tr>
<th>週数</th>
<th>内容</th>
<th>講義形式</th>
<th>担当者</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>第1週</td>
<td>「大学で何を学び、何を目標とするのか！」 保健看護学科の教育方針と教育目的達成のための取り組みについて</td>
<td>一斉講義</td>
<td>学科教員</td>
</tr>
<tr>
<td>第2週</td>
<td>大学での学び方</td>
<td>一斉講義</td>
<td>学内講師</td>
</tr>
<tr>
<td>第3週</td>
<td>看護学を学ぶ仲間を知ろう！</td>
<td>グループワーク</td>
<td>学科教員12名</td>
</tr>
<tr>
<td>第4週</td>
<td>大学生活のライフプランー１：セルフマネジメント、タイムマネジメント等</td>
<td>一斉講義</td>
<td>学科教員</td>
</tr>
<tr>
<td>第5週</td>
<td>学習支援 「レポートの作成方法」</td>
<td>一斉講義</td>
<td>学科教員</td>
</tr>
<tr>
<td>第6週</td>
<td>社会生活の基礎－1：「マナーとコミュニケーション（言葉使い）」</td>
<td>一斉講義</td>
<td>学外講師</td>
</tr>
<tr>
<td>第7週</td>
<td>社会生活の基礎－2：「よい人間関係とは！」</td>
<td>一斉講義</td>
<td>学内講師</td>
</tr>
<tr>
<td>第8週</td>
<td>社会生活の基礎－3：「充実した人生のための健康生活一食生活、禁煙等」</td>
<td>一斉講義</td>
<td>学科教員</td>
</tr>
<tr>
<td>第9週</td>
<td>社会生活の基礎－4：「充実した人生のための健康生活一食生活、禁煙等」</td>
<td>グループワーク</td>
<td>学科教員12名</td>
</tr>
<tr>
<td>第10週</td>
<td>学習スキル－1：「看護学の学習方法」</td>
<td>一斉講義</td>
<td>学科教員</td>
</tr>
<tr>
<td>第11週</td>
<td>学習スキル－2：「プレゼンテーションの方法（自己ピーアール等）」</td>
<td>講義・演習</td>
<td>学科教員</td>
</tr>
<tr>
<td>第12週</td>
<td>学習スキル－3：「文献検索の方法Ⅰ」</td>
<td>演習</td>
<td>学内講師</td>
</tr>
<tr>
<td>第13週</td>
<td>看護職のキャリアデザイン</td>
<td>一斉講義</td>
<td>学科教員</td>
</tr>
<tr>
<td>第14週</td>
<td>看護職のキャリアデザイン</td>
<td>グループワーク</td>
<td>学科教員12名</td>
</tr>
<tr>
<td>第15週</td>
<td>講演会：「キャリアプラン：専門看護師としての歩みと活動」</td>
<td>講演会</td>
<td>学外講師</td>
</tr>
<tr>
<td>第16週</td>
<td>発表會 テーマ：「看護職者としての私の人生デザイン」</td>
<td>グループワーク</td>
<td>学科教員12名</td>
</tr>
</tbody>
</table>